ISSN 2186−0734

Vol.28 No.1 March, 2019
Kansai Research Journal of Budo

関西武道学研究

第28巻 第1号

原 著

椿 武 水谷未来 前田明
連続ジャンプトレーニングが剣道選手の打突時間と左足の引き付け時間に及ぼす影響 …… 1

行事報告

平成30年度 関西支部研究発表会 …… 11

平成30年度活動報告 …… 31
関西武道学研究投稿規程 …… 33

日本武道学会関西支部
Kansai Branch of Japanese Academy of Budo

海外留学生向け日本武道講義（剣道及び杖道）の実践報告

髙山一三（関西外国語大学）

A Practical Teaching Report of Japanese Martial Arts Course (Kendo & Jodo) for International Students

Ichizo Takayama (Kansai Gaidai University)

1．はじめに

日本の武道は、外国人にとって多くの映画、漫画、ビデオゲームや書籍等で紹介されており、大変人気の高い文化的象徴となっている。大学レベルで外国人留学生に日本の武道を教えることは、彼らの身体能力向上に資することに加え、日本の歴史、文化、哲学等を教育するための効果的な方法の一つでありうる。筆者は幸いにも、所属教育機関（以下「本学」）において、２０１８年度秋学期（以下「今学期」）から外国人留学生向けに武道（特に剣道及び杖道）の講義を担当することとなり、一学期間の講義を終えたところである。本稿は、当該講義の簡単な実践報告である。

2．講義の概要

本学では、毎年延べ約６００名の学生を、海外の提携大学から交換留学生として受け入れており、日本やアジアの言語、文化、歴史、政治、国際関係等に関する講義を留学生別科(Asian Studies Program)として英語で提供している。以前から日本文化紹介のためのクール・ジャパンという括りで、陶器の制作、漫画の描き方、琴の演奏などの実践形式の講義が正規科目として開講されていたが、筆者の希望と提案により、今学期から日本武道の講義をこのカテゴリーに含めてもらえることとなった。

本講義は、伝統的日本文化として、日本の武道（特に剣道及び杖道）を留学生に紹介するものである。本講義の主たる目的は、留学生に日本の武道とその歴史（武士道精神を含む）に関する基本的知識を提供するとともに、実際に剣道場において剣道及び杖道の稽古を体験してもらうことによって、日本滞在中の身体能力の維持向上を目指すものとした。

具体的には、一学期３０コマの講義中奇数回を教室による講義編として、日本の武道、特に剣術、剣道及び神道夢想流杖道の歴史及び、武士階級の倫理的、精神的よりどころであった武士道の発展に関する講義を行い、偶数回は、剣道場にて剣道及び杖道の基本を指導し、その実践を体験的に稽古してもらうものとした。成績は、講義編に関する中間試験３０点及び期末試験３０点、並びに実技編の参加態度３０点及びトーナメント大会の結果１０点の合計１００点で評価するものとし、６０点以上の合格者には交換留学生として本学から３単位が与えられる。今学期の参加留学生は、アメリカから９名、イギリス、中国、オランダ、フィンランド及びオーストラリアから各１名の合計１４名、男女比は９名対５名であった。

3．教室における講義編

教室における講義編のための教科書としては、主として、Minoru Kiyota (2002), *The Shambhala Guide to Kendo: Its Philosophy, History, and Spiritual Dimension*：Shambhala Publications, Inc. を使用し、武士道に関しては、同書に加えて、新渡戸稲造、*Bushido : The Soul of Japan* を使用した。中間及び期末試験において、剣術、剣道、神道夢想流杖道の歴史及び武士道の発展に関する留学生の理解度をはかることとした。（講義編の内容の詳細については、下記「講義編のシラバス」参照。）

4．剣道場における実技編

剣道場における実技編については、予算の関係から防具を使用しての実践稽古は実施せず、素振りや足さばきを中心とした基本稽古、打ち込み稽古、及び木刀による基本技稽古法（以下「基本技稽古法」）の習得を目指すこととした。学生が使用する用具(木刀、竹刀、杖）については、近所の武道具店と交渉のうえ、一人一式8,500円にて販売していただいた。また、大学の剣道部員数名の協力を得て、実技指導及びトーナメント大会の運営、審判等の手伝いを依頼した。

実技編においては、毎回必ず事故防止のためのストレッチおよび準備運動を行った。また、初回の講義では、日本の武道はすべて「礼に始まり、礼に終わる」ことを理解してもらうため、道場への入退の際や神前への礼、日本剣道連盟で指定している座礼、立礼、蹲踞等の方法について、解説のうえ、実際に体験してもらい、次回以降毎回行うよう指導した。さらに、稽古の始まりと終わりに行う「黙想」の方法についても、その意義および目的とともに解説のうえ、毎回必ず行うこととした。

実技編の最終講義においては、基本技稽古法の掛り手としての演武の出来栄えを競うトーナメント方式の大会を企画し、留学生のモチベーションを保つ一助とした。試合形式は、３名の審判のうち２名が勝ちと判定して審判旗を揚げた方の選手を勝ちとする、概ね杖道の試合形式に準じたものを採用した。各選手が自分でクラスメートの中から元立ちを自由に選ぶこととし、審判は原則として掛り手の演武の出来栄えのみを判定するものとした。１回戦及び２回戦は、次の技を筆者が指示するようにしたが、準決勝以降は筆者の指示なく技の順番の記憶も審判の対象とした。特に決勝戦では９本すべての技を演武させたが、決勝戦にふさわしく両者とも初心者とは思えないほどの素晴らしい演武を披露してくれた。

杖道については、今学期は、単独基本12本中４本（本手打ち、逆手打ち、引き落とし打ち及び返し突き)、並びに全日本剣道連盟杖道形12本中３本(着杖、水月及び斜面）の限られたものしか指導できなかったが、留学生たちは、古武道的な趣のある杖道を苦労しながらも興味をもって稽古してくれ、多くの学生が杖道をもっと早くから、もっと多くの技を習いたかったというコメントをくれた。日本に興味を持ってやってきた海外からの留学生にとっては、現代武道に属する剣道に比べて全身を満遍なく使う古武道的な杖道に一層の魅力を感じる者が多いということも、新鮮な驚きであった。（写真「杖道の稽古風景」参照。）

杖道の稽古風景

5．まとめ

概ね今回の日本武道講義全般に関しては好意的な学生が多かった。特に、実技編や最終日のトーナメント大会に対する評価は高く、今後もこのコースを継続すべきだというありがたいコメントを多くもらった。一方で講義編では、中間試験前まで行っていた一方向的な講義スタイルに対しては不満が多く、後半において、事前に読んで来させた教科書の内容を学生同士で討論させ、最後に筆者が質問に答える、補足をするアクティブ・ラーニングの方式に変更してからは、興味をもって講義に参加する学生が増加した[1]。

幸い、筆者は本学において２０１９年度も春学期及び秋学期で留学生向け武道講義の担当を継続することが決定しており、春学期の授業は既に開始されている[2]。春学期においては、基本技稽古法ではなく、より複雑な日本剣道形を取り入れて、今回の成果と比較したいと考えている。また、前述の通り、今回学生に対して実施したアンケート調査のコメントとして、杖道をもっと早くから習いたかったというものが多かったことから、この春学期においては、中間試験後には杖道の指導を開始することとしたい。

本学への留学生のうち一人でも多くの者が、本国に帰国後、剣道または杖道を継続してくれることを期待している。そのためには、とにかく講義を楽しんでもらえるよう、今後もいろいろな企画を取り入れていきたいと考えている。日本の武道の体験を通じて、本学への留学生が帰国時には日本に対する一層の興味及び好意をもってくれるようになれば、これ以上の喜びはない。

以　上

講義編のシラバス

第１週　導入／剣道とは
1．自己紹介、講義概要
2．剣道とは何か
3．剣道の実践にあたっての注意事項

第２週　日本の武道
1．日本の武道とは何か
2．各種武道の概略
3．道場の意義

第３週　剣術の発展Ⅰ
1．剣術の歴史的背景概略
2．室町時代以前の剣術の歴史

第４週　剣術の発展Ⅱ
1．戦国時代の剣術
2．主要流派の成立

第５週　剣術の発展Ⅲ
1．江戸時代初期の剣術
2．江戸時代中期の剣術
3．江戸時代末期の剣術

第６週　武士道の発展Ⅰ
1．武士道の歴史的発展概略
2．室町時代以前の武士道

第７週　武士道の発展Ⅱ
1．戦国時代の武士道
2．江戸時代の武士道

第８週　中間試験

第９週　武士道の三つの特質
1．忠誠心と慈悲心
2．「義」の概念
3．名誉と死

第１０週　新渡戸稲造の「武士道」

第１１週　剣道における禅宗の影響（剣禅一如）

第１２週　近現代における剣道

第１３週　現代における武士道

第１４週　武道とリベラルアーツの融合（文武両道）

第１５週　総復習

註

1）中間試験において、試験問題とは別にそれまでの講義に関するコメントを募った。
2）２０１９年度春学期の参加留学生は、アメリカから６名、カナダから２名、ハンガリー、ペルー、フィンランドから各１名の合計１１名、男女比は７名対４名である。

編集委員会　Editional Committee

（編 集 委 員　Editor）

坂　東　隆　男　　T. Bando

岡　田　修　一　　S. Okada

藪　根　敏　和　　T. Yabune

太　田　順　康　　Y. Ota

椿　　武　　T. Tsubaki

平成31年3月30日　印刷発行　　非売品

発行者　湯浅　晃

発行所　日本武道学会関西支部
〒651-1111
兵庫県神戸市北区鈴蘭台北町 7 丁目 13-1
神戸親和女子大学

印刷所　阪東印刷紙器工業所
〒553-0004
大阪市福島区玉川3丁目6番4号